

[11-1] 今後、新たに予定されている調査
I 水田面積増加
<p> も、とも古い航空写真である1954年に示された水田面積と現在のそれとの間に大きな差はない。一方、Pho Khen が、彼の青年期の水田として描いた図によると、水田面積は現在の半分に満たない。従って、1940年代のほぼ10年間に非常に速度で開田が進み、以後、ほとんど増加がないことになる。これは一寸、考えにくい。Pho Khen の描いた図は再考しなくてはならない。 </p>
<p> それとは別に、個々の地主にあたって、彼の所有地についての、開田のプロセスを丹念に聴き出す努力が必要と思われる。これは、地図の読めるPho Khen 又はPho Ma と学生アルバイトの内の1人との組合せによる古老インタビューを必要とする。 </p>
II 屋敷地調査
<p> 水野氏のいう屋敷地共住集団は実際にはある </p>

ては手ならない場合が多い。すなわち、屋敷地を共にしなくとも、家計を同一と可る、あるいは、一部重複させている世帯が存在する。しかし、このような状態は、屋敷地が不足するようになつた近年のことかも知れない。かつ、人口が少なくなつた時代には、親戚同志スル同志の屋敷地は、もっと近接しており、その中には、真に屋敷地共住集団と呼ばれるようなものを含んでいたことが考えられる。このような意味合で、居住地を過去にさかのぼつて調査し、住民間の系譜上の位置と対応させねばならない。これをまず系譜調査として来たソニミの境にやらせる予定。

Ⅲ 現金収入源史

主たる農業現金収入源の変遷は、ある程度判明してゐる。すなわち、1940年代の綿、それに続くヤナブ、そしてキャッサバと野菜である。家畜の重要性も時代と共に変化したと思われるが、明らかでない。農外収入として

は村内と村外がある。出稼ぎの形態、期間、
行先等も、時代によって異なる。

これらの事を使えるデータとして収集した
い。そのためには、年令層別、個人サンプル
に、これまでのすべての現金収入歴を聴く必
要がある。

〔11-2〕 K K U 農学部セミナー

12月13日、DD村に関するセミナーを K K U
農学部の Farming System Research グループに依
頼され、福井が2時間程話をした。主に、11
月末に N R C T へ提出した中間経過報告に書
かれたあることを話題とした。最後に、次の
2点について特にコメントを求めた。

A 人口移動について

人口移動は東北タイ人の基本的な特徴のひ
とつである。近年の農村→都会への一方向の
移動も、勿論、DD村で見られるが、それとは
別の形の人口移動があった。それが東北タイ
社会全体の大きな特色となっている。

このように思われる根拠は以下の通りである。

① 農村→都会ではなく、農村→農村の人口移動が伝統的に存在し、今日でも顕著である。

② クレドナー以来の広義のタイ族の雲南からの南下という傾向が言われている。

③ DD村における農村間移動は、「よい水田を求めて (Haa Maa Dii)」行はわれる。

Haa Maa Dii を実行するのは、娘の数の多い父親で、それは責任ある、尊敬されるべき行動と考えられている。彼等は伝統的価値を認めることに、より熱心であり、しばしば、より宗教心が強い。Haa Maa Dii はひとつの Ethic である。

④ 村の家族組織、親族組織、家族周期に伴う相続、その他の慣行は、Haa Maa Dii による新農地開拓という背景のもとで、最もよく機能しているように思われる。

⑤ 土地自体に対する執着が弱く、村の人

間関係に対する執着が強い。

以上のような移動性が東北タイ人の特性であるとするならば、東北タイの地域開発は次のように考えられねばならない。すなわち、東北タイ人の福祉の向上に、東北タイという地理的に明確に区別された地域内に限って考えるのではなく、その住民の最終的移住先を地域にとらわれずに、全タイ国領土という枠組の中で考えねばならない。

B 村経済の二重構造について

自給自足的経済（米生産を中心とする）と現金経済構造のふたつが併存し、その間に相互関係があるという構図を考えた方が、村経済の実態をよりよく理解できると思われる。すなわち、村の可べりの経済活動を、現金、現物経済を問わず、おしなべて貨幣価値に換算して比較することは、重要な点を見落す危険性が大有り、このような比較は米生産、土地所有に関する農民の行動や判断が非合理的なものである印象を与えらる。

のように考える根拠のひとつは農家経済調査による各戸の貧富のランキングが、直接インタビューによる農民の貧富のランキングとまったく一致しない点である。また、農家経済調査における米生産の全経済活動に占める割合が極端に低いにもかかわらず、村民の resource allocation, 稲作の重要性に関する意識が unproportional に大きいからである。

このことは、稲作の技術的改善に関して、次のような意味をもつ。すなわち、商業生産化していない米作にあつては、単層面積当収量増加を結果する技術ではなく、また安定化の技術がとめられていると思われる。また、かんがいによる二期作化といったような drastic な変化が短期間に起らない限り、土地生産性の向上は、商業生産化を促進せず、在村のままの現金収入機会の増大とあいつ、水田の細分化を可能とし、よつて、村の最大扶養人口を増加させる方向に働くと考えられ

る。

セミナーの出席者は約50人、農学部以外の社会系のスタッフも参加していた。多くは、学際的は村落調査の経験をもっている人達であった。西洋人は2人、Terry Grandstaff というアメリカ人、G. Conway というイギリス人。質問の内容から判断すると、2人の西洋人はもとより、多くのタイ人よりも、東北タイ農村の基本的な性格に関して、我々の方がよく知っているという印象を持った。出席者の多くが行っている農村調査はより開発指向であり、intensity が小さく、多数の村をカバーするという方法がとられている模様。1ヶ村に集中した学問指向型研究が如何に意味のあるものであるか、デモンストレーションをしたと思っただったつもりであるが、効果があったかどうかは不明。

(福井記)

近況報告

12/2 服部入村 (1/2頃まで)

12/4 翠川離村

12/5 北村、西村 (京大農) 村訪問

12/9 ~ 12/11 服部、福井、河野、松藤、Udon-Sakon
Nakhon-Roi-et 方面へ広域地形、土壤調査
旅行

12/13 K K U セミナー - 2 DD村研究に報告

12/15 K K U 卒業証書授与式

(Semkhat, Samsin, Saiyon, wa)

今後の予定

12/18 石井、速水来村

12/19 故水野教授慰霊タンブン

12/21 B B Q パーティー

12/22 - 12/27 北タイ旅行 (全買)

12/26 黒田、宮川、松藤帰国

1/16 舟橋入村 (1/2頃まで)

1/19 服部、福井、須羽、小池離村

1/23 服部、須羽帰国

1/24 小池帰国

1/25 福井帰国(?)

3/4 辻井来村

3/13 舟橋離村

3/28 辻井離村 (今年度調査終了)